オピオイド使用前後の患者が持つ不安について

キーワード：癌性疼痛　オピオイド

経塚　沙和

Ⅰ．はじめに

婦人科悪性疾患のため入院している患者において、疼痛コントロール目的でオピオイド導入となるケースが多い。その多くの患者から使用に対し、「恐い」「依存性がありそうで不安」「寿命を縮めてしまうのではないか」「末期の人が使うもの」などといった発言を受ける。さらに、導入の際、医師・薬剤師、看護師からオピオイドの説明やオリエンテーションを行うが、説明後、早期に導入となるケースが多いため患者の不安に配慮した看護介入の難しさを感じる。

大崎らは、看護師を対象とした研究で、癌患者のオピオイド使用に対するバリアとして、オピオイドに対する誤解や副作用対策が不十分なことが考えられると述べている。[1] 本研究では、実際にオピオイドを使用している患者の不安について明らかにすることで、今後の患者の不安に配慮したオピオイドの導入支援に繋げていきたいと考える。

Ⅱ．研究目的

オピオイド導入後の患者に聞き取りを行い、オピオイド導入前の患者が抱える不安や期待、導入後の反応や意識の変化を知ることを目的とする。

Ⅲ．用語の定義

オピオイド：麻薬性鎮痛薬やその関連合成鎮痛薬などのアルカロイド及びモルヒネ活性を有する内因性または合成ペプチド類の総称

レスキュー：疼痛時に屯用で即効性の高いオピオイドを追加すること

バリア：癌患者のオピオイド使用を妨げる要因

婦人科悪性疾患：転移による癌ではなく、卵巣癌、子宮体癌、子宮頸癌、腹膜癌といった婦人科領域原発の悪性疾患のこと

Ⅳ．倫理的配慮

倫理審査委員会にて承認を得た研究計画書に基づき、研究参加は自由意志であり、途中で辞退できること、辞退した場合も不利益を被る事はないと、本研究で得た情報は研究以外で使用しないこと、プライバシーの保護について口頭、書面で説明し同意を得た。

Ⅴ．研究方法

1．研究デザイン

事例研究

2．研究期間

2021 年 9 月~2021 年 11 月中旬

3．対象者

A 病院の産婦人科において、婦人科悪性疾患に対する疼痛コントロール目的でオピオイドを導入した患者 1 名

4．データ収集方法

苦痛のスクリーニング、アンケート用紙を記載してもらい、15 分程度インタビューを行う。インタビューを行う際は、患者の疼痛や体調に応じ、環境整備を行った上でプライバシーに配慮して行い、内容は IC レコーダーへ録音する。また、カルテ記録から情報収集を行う。

5．分析方法

苦痛のスクリーニング、アンケート用紙、インタビューの結果から、抽出した内容を先行文献を用いて分析する。

Ⅵ．事例紹介

A 氏、30 代、女性。独居であり、キーパーソンは関東在住の父。職業は中学校教師。不

正出血を主訴に2021年2月、近医を受診。子宮頸癌検診を受けられており、その際は異常はなく、追加の精密検査を勧められていた。また、EP製剤の内服が始まり、内服後は不正出血は止まっていたため、精密検査を受けられていなかった。6月より不正出血が再開し、7月にA病院へ紹介受診となり、精査目的で入院。精査の結果、子宮頸癌ⅣB期の診断。治療として、TC療法が開始された。転移による坐骨骨折のため疼痛が強く、入院後すぐにオキシコドン内服開始となった。オピオイド内服にあたり、医師・薬剤師・看護師がオリエンテーションを実施した。

Ⅶ．結果

オピオイド導入から2ヶ月経過した時点で、導入時のオピオイドに対する不安や現在のオピオイドに対する思いについて振り返ってもらった。アンケート内容については表1に示す。インタビューより抽出したコードを「」、カテゴリーを【】で示す。詳細は表2に示す。

最初に研究の目的を説明した際、「病院に来た時、骨折を庇って動いているうちに左側の腰も痛くなって動くのもきついくらい痛かったから、麻薬が始まることに抵抗や不安はほとんどなかった。ただ痛みをどうにかしてほしいという気持ちだった。」とのことだった。インタビューを行う中で抽出されたオピオイド導入前の不安として、「体に良くないもの」「依存症になるのではないか」ということがあげられ、【オピオイドに対するイメージ】とした。オピオイドの導入後の反応についての質問では、「痛みが治まることでイライラすることが減った」「痛みが続くことに対する漠然とした不安が少なくなった」「麻薬を使うことに対する不安はほとんどなく、痛みが治まっているという実感が得られているのでよかった」ということがあげられ、【疼痛軽減による安心感】とした。「排便の時に座っていることや怒責をかけることで痛みが強くなることが減った」「残尿感が減った」「痛みで夜も眠れていなかったが、麻薬を使い始めて眠れるようになった」ということについては【身体症状の変化】とした。「坐骨に直接ジンジンひびくので座っていられなかったが、現在は座れるようになっている」「運転中のお尻の痛みが楽になった」「痛みのことを気にせずにバスケットができるようになった」ということについては、【ADLの拡大】とした。「最初は吐き気が強くて、吐き気止め飲んでもムカムカする感じが治らなかった。」「徐々に麻薬に体が慣れてきたのか吐き気はなくなっていった」「今は麻薬の副作用は特になくて普通の生活を送られている」ということについては【副作用に対する対処】とした。現在は、痛みは定期のオピオイド内服によってNRS0/10の状態でレスキューも使用することなく日常生活を送られている。

Ⅷ．考察

WHOは、がん患者に対してがん疼痛治療を目的としてモルヒネなどの医療用麻薬を適切に使用した場合、その精神依存はほとんど問題にならないと報告している。[2] 今回A氏はオピオイドに対する不安の内容として良くないものというイメージや依存性に対する恐怖をあげており、そうしたイメージに対し、正しい知識を持って説明することで不安を軽減していくことが必要である。A氏の場合、疼痛が排泄や睡眠など日常生活に大きな影響を及ぼしており、オピオイドに対するバリアよりも疼痛が軽減することへの期待が上回っていたと考える。また、インタビューを行った際は、TC療法2コース目を終えた時点であり、治療効果による疼痛の軽減もみられていたと考える。実際に疼痛コントロールができるようになったことで、排泄や睡眠に対する障害が軽減し、精神的な安定につながっている。また、趣味であるバスケットボールができ、その中で仲間との交流を通して気分転

換を図ることができたことも精神的な安定につながっていたと考える。このように看護師は疼痛がもたらす影響について、患者を全人的に捉え、それぞれの生活背景を踏まえた上でアセスメントし、介入について検討していく必要があると考える。また、病状の進行状況によっても不安の内容は変化していくと考える。オピオイドの副作用に関して、A氏は導入直後の嘔気・嘔吐や便秘が出現していた。嘔気はオピオイド導入初期や増量時にしばしば見られる症状であり、便秘もオピオイド使用中の患者のほとんどが経験する症状である。オピオイド導入時の制吐剤、緩下剤は症状出現時にいつでも使用できる状況にすることが推奨されており[3)]、副作用対策については、医師、看護師、薬剤師を中心に、緩和ケアチームとも協同しながら介入方法を検討している。こうした取り組みが副作用症状の軽減や安心につながっていったと考える。

Ⅸ. 結論

1. オピオイドに使用前の患者が抱える不安として、オピオイドに対する良くないイメージがあり、医療者は正しい知識を持って説明していくことが必要である。
2. 疼痛の状況によっては、オピオイドに対する不安よりも期待が上回る場合もある。
3. 疼痛に伴うADLの低下による不安が見られることがあり、患者を全人的に捉えたアプローチが必要である。
4. オピオイド導入後の副作用に対する不安が見られることがあり、医療チーム全体で対策を検討していくことが必要である。

Ⅹ. おわりに

本研究を行うにあたり、オピオイド使用前の患者はオピオイドに対し大きな不安を抱えているという先入観を持っていたが、それを上回る期待を抱えていることもあると気づき、患者それぞれのニーズに沿った介入をタイムリーに行うことが必要であると改めて感じた。今回は1事例のみの研究であり、対象者は比較的オピオイドに対する受け入れも良好で、オピオイド導入後の疼痛コントロールも良好であった。しかし、より不安の強い患者や導入後も疼痛コントロールが不良の患者が対象の場合は違う結果になることも考えられ、今回の研究の限界や研究を続けていくことの必要性を感じた。今後も医療チームで協力しながら患者の不安に寄り添った看護を行っていきたい。

Ⅺ.参考文献

1）大崎絢也　他：一般病棟に所属する看護師が捉えるがん患者のオピオイド使用に対するバリアと介入方法~質問票をもとにインタビューを行い質問紙法による質的内容分析した意識調査~、厚生連医誌第26巻1号、22-25、2017.
2）がんの痛みからの解放　WHO方式がん疼痛治療法　第2版、金原出版、19、1996.
3）日本疼痛医療学会緩和医療ガイドライン作成委員会編．がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン、金原出版、149-151、2014.

表１

質問内容	結果
1.今の疼痛状況	（レスキュー使用前）0/10 （レスキュー使用後）0/10 （疼痛部位）　なし （疼痛の種類）なし
2.麻薬に対しての思い（良いもの、悪いものに関わらず自由に）	・体に良くないものというイメージ
3. 麻薬の内服が始まることについての思い	・特に心配することはなかった
4. 麻薬が始まってからの気持ちの変化	・痛みのコントロールができるようになって精神的に少し落ち着いたと思う
5. 麻薬について今困っていることや今後に対する不安	・特になし

表２

カテゴリー	コード
オピオイドに対するイメージ	・体に良くないもの
	・依存症になるのではないか
疼痛軽減による安心感	・痛みが治まることでイライラすることが減った
	・痛みが続くことに対する漠然とした不安が少なくなった
	・麻薬を使うことに対する不安はほとんどなく、痛みが治まっているという実感が得られているのでよかった
身体症状の変化	・排便の時に座っていることや怒責をかけることで痛みが強くなることが減った
	・残尿感が減った
	・痛みで夜も眠れていなかったが、麻薬を初めて眠れるようになった
ADLの拡大	・坐骨に直接ジンジンひびくので座っていられなかったが、現在は座れるようになっている
	・運転中のお尻の痛みが楽になった
	・痛みのことを気にせずバスケットができるようになった
副作用に対する対処	・最初は吐き気が強くて、吐き気止めを飲んでもムカムカする感じが治らなかった
	・徐々に麻薬に慣れていったのか吐き気は無くなっていった
	・今は麻薬の副作用は特になくて普通の生活を送られている